「古典的と浪漫的」の不整合について

渡邊次男

最初に「古典的と浪漫的」對立が文藝理論的意味に把握されたのは *Über das Studium der griechischen Poesie* に於てである。勿論この背景にはヴィンケルマン Winckelmann レッシング Lessing 等の生み出した「ギリシア崇拜熱」があり、更に又この理論の發展にはゲーテ Goethe シルレル Schiller 等が大きく影響しているのは確である[註1]が、「古典的 Klassisch と浪漫的 romantisch」なる言葉に今までにない意味を最初に附加したのはフリードリッヒ・シュレーゲル Friedrich Schlegel である[註2]。然し彼シュレーゲルは飽くまで名付親なのである。「古典的と浪漫的」をめぐる論爭の出發点に過ぎない。それ故ブリュンチェール Brunetière は言う——。「浪漫主義の定義は語源學の問題でもなければ學説の問題でもない。寧ろ歴史の問題である。そして『浪漫主義』という言葉はそれ自体の中に重んずべき意味をもたないから、唯作家と作品とが歴史を通じて即ち時を通じて與えたいろいろな意味の契機に滿ちているにすぎない[註3]。」以下我々はシュレーゲルを出發点として「古典的と浪漫的」概念をめぐる數多くの不整合を追求したいと思う。

兄シュレーゲル August Wilhelm Schlegel とスタール夫人 Mme de Staël[註4] を通じて世界的になったのは彼の思想中の「古代と近代」「北歐と南歐」「異教とキリスト教」等々の對立の理論である[註5]。古代と近代の藝術を「彫刻的」bildend と「音樂的」musikalisch[註6]「有限」Begrenzung と「無限」Unendlichkeit「明朗」heiter と「憂鬱」melancholisch 等々の對立から見て夫々を「古典的と浪漫的」特徴とする。然しこの有名な對立の理論の根本をなす「古代」と「近代」とは如何なるものであらうか。ハイネ Heinrich Heine はシュレーゲル的概念をそのまま承けて「ギリシア・ローマ文學」を「古典的」「中世文學」を「浪漫的」と呼ぶ[註7]。然し我々はギリシアとローマの差の大きい事を知っている。では「古典的」とは果して歴史的古代ギリシアであらうか。問題はそのように簡單ではない。著明なるギリシア研究家ブッチャー S.H. Butcher は極めて非古典的な「ギリシア人の憂鬱」をギリシア代表的人物の作品に次々に指摘する[註8]。ギリシア末期の文學には如何に「浪漫主義の曙」がはつきりと感じとられる事か[註9]。アバクラムビ L. Abercrombie にとつて「プラトンは浪漫的夢と感情の永遠なる源である[註10]。」「ホーマー Homère は正當な意味で古典作家と言うに不充分であらう。彼は一時代全体の半野蠻的文明の廣大な生動する表現

は持つているけれどもそれにふさわしい個性の影は薄い云々。」[註11]とサント・ブゥブ Saint Beuve は考える。ペーター Walter Pater にとつて *Odyssey* は *Iliad* より浪漫的であり Aeschylus は Sophocles より浪漫的なのである。[註12] ニィチェ Nietzche はギリシア世界にも二つの對立、即ち造形藝術の「アポロン的藝術」と音樂的非形象的藝術たる「ディオニュソス的藝術」を認める。[註13] アッティカの悲劇は、「ディオニュソス的」であると同時に「アポロン的」なのである。同じギリシアでもペリクレス Pericles 時代のアテネ社會が他とは非常に違つた獨自なものであつた事はよく言われる。それが故に「古典的美」の特質を論じて一批評家はそれをアテネ社會に限定し、「紀元前四〇四年アテネがスパルタに屈服した年は古典藝術の最後の日であつた」[註14]とする。かくて紀元前四世紀の美術は「浪漫的」と呼ばれさえする。[註15] かくして我々は「古典的」即「歴史的ギリシア」なる素朴さは捨てねばならない。

「浪漫的」である「近代」も曖昧な概念である。W・シュレーゲルにとつてダンテ Dante は「浪漫的文學の父」であり、セルヴァンテス Cervantes シェクスピア Shakespeare カルデロン Calderon は偉大な浪漫的作家である。更に又レッシング Lessing は「近代的」ではあるが「浪漫的」ではないのであるとあつては、[註16]「近代」にも浪漫的と非浪漫的とがある事を知らねばならない。元來複雜な「近代」を單に「古代」との對立に於て捉えようとするのが無理なのである。彼等の「キリスト教」の概念も極めて素朴である。例えば *Lancelot and Guinivere, Tristram and Iseult, Aucussin and Nicolette* は果して「キリストの血から生れた受難華 Passionsblume」[註17]であらうか。戀人の爲には地獄にも喜んでいくオーカッサンは十字架より生れた花にしては妙な花である。グリアスン H. J. C. Grierson はハイネの中世文學に對する見方をはげしく批判する[註18]——「人間精神はロマンス文學の中にキリスト教が誹難し抑壓せんとした感情を求めて一つのはけ口をみつけたのである。」グリアスンにとつてロマンスの世紀とも言われる十二、三世紀は既に反キリスト教的精神が明瞭に目ざめた時代なのであり、個人的武勇、名譽の理想、神へではなくて一女性への熱烈なる愛と献身の理想は本質的にキリスト教的ではないのである。又中世の女性崇拜は聖母崇拜によるよりも寧ろギリシヤ・ローマの詩歌の精神につながるとする。確にヴィーナスは スウィンバン Swinburne をまつまでもなく「女性」として考える時、蒼白きマリアに較べて魅力あるものであらう。中世を唯「キリスト教」一色に塗る素朴さはもはや不充分である。キリスト教自身ギリシア・ローマ「古代文化」の傳播者だつたのではないか。[註19]

此處に我々はシュレーゲル的對立の理論を徒に歴史的「古代と近代」にあてはめ、「民族」「風土」「宗教」等と直接結びつける素朴さを捨て、これらの特徴を類型的に把握すべきである。例えば古代ギリシアの主調音はシュレーゲル的古典的である事は確である。「浪漫主義の曙」と呼んだ「ギリシア末期の」詩的表現も「近代浪漫主義のものである情緒のあの神秘的深さ、奇異な感じ、深刻さなどは持つていな

い」とブッチャーは先に引用した書を結んでいる。ニィチェにとつても「ギリシア的ディオニュソス」は「蠻族のディオニュソス」から區別される。[註20] かくてシュレーゲル的理論は「文化類型的概念」として生命をもたすべきなのである。それ故にシュトリッヒ Frayz Strich は「古典的と浪漫的」を「完成 Vollendung と無限 Unendlichkeit」の二つの樣式の對立と認める。[註21] これは夫々「ドイツ浪漫派」と「ドイツ古典派」の兩派から出發した統一理念であるが、人間の文化全体に擴大し得る二つの類型とみなされる。即ち文藝の發展は人間の「永遠化への意志」の二つの現象形式たるこの類型の不斷の交替として把握されるのである。又シュペングラー Oswalt Spengler は古代ギリシア・ローマ文化の精神と西歐文化の精神とを夫々「アポロ的」と「ファウスト的」として對立させる。[註22] シェフラー Karl Scheffler は「ギリシア精神」に對する「ゴティック精神」を考える。[註23] アーノルド Matthew Arnold の「ヘレニズム Hellenism」と「ヘブレイズム Hebraism」の對立は厨川白村を通じて殊に我々に親しい。[註24] 然し乍ら現在の我々には、時代思潮そのものの隆替が必ずしもただ一つの方向に於て對立する兩極的類型の規則的な交替としては把握されがたい事を教えてくれる數多くの批評家がある。[註25] 三次元的對立を樞軸として立て、言わばこれを坐標軸として諸種の藝術的樣式の位置測定すら行われている現在である。[註26] この点でもシュレーゲル理論はたとえ文化類形的概念として整合されてももはや全く「歴史的」なものであると言える。

シュレーゲルにあつてもともと極めて不整合であつた「古典的と浪漫的」概念は所謂「歴史上特定の一時期」に適用されるに至つて遂にプロトイス的 Proteus 或はカメーレォン的 Chamäleon 性格を帶びるに至つた。[註27] 今我々は簡單に「歴史上特定の一時期」と言つたがこれが極めて複雜である。[註28] 一般的に言つて「古典的時代」とはフランスのルイ十四世時代、ドイツではクロップシュトック Klopstock ヴィーラント Wieland レッシング Lessing 等により地ならしされた「國民文學」がヘルデル Herder シルレル・ゲーテ等により世界的理念を得るに至つた時代、イギリスではドライデン Dryden ポープ Pope を中心とする所謂 Augustan Age と呼ばれる時代である。然しこの三時代は時期的、民族的、社會的條件になんと甚しいひらきがあることか。それを「古典的」の一本の線で結ぼうとする。シュレーゲル的古典的なる言葉の概念が既に不整合なものであつたのに、この「特定の一時期」たる「古典主義時代」の雜多な特性の逆作用を受け、益々多くの夾雜物にふくれあがつて來たのである。「古典的」とは「ギリシア的」「異教的」「南方的」等々に加えて、「ラシィーヌ的」「コルネーユ的」「レッシング的」「シルレル的」「ゲーテ的」「ドライデン的」「ポープ的」等々の性格を加えてしまつた。これらが實に雜多なものである以外に、もともとこの三時代の何人と雖も自らの時代を「古典的」なる名稱で呼んだものはいなかつた事を指摘せねばならない。そして又「思潮」としての古典主義が存在したかどうか問題にせられる位である。[註29] ラシーヌ Racine やラ・フォンテーヌ La Fontaine を最初に「古典的」と呼んだヴォルテール Voltaire も最初は「ルイ十

四世紀時代の偉大な才能」と呼んでいたにとどまるし、彼等に古典的なる名稱がつけられ[註30]「古典主義」なる言葉の出來たのはシュレーゲル以後である。浪漫主義の意識が「古典的」意識を逆につくり出したと言える。事實、問題は「浪漫主義」の面に多い。以下普通に言われている「特定の一時期」がこの場合にも如何に問題を混亂させているかを考えてみよう。

先に我々は歴史的「ドイツ浪漫派」は必ずしも「ドイツ古典派」と對立するものではない事を指摘せねばならない。この兩派とも「啓蒙思想 Aufklärung」と呼ばれるものに對立する点では共通の地盤に立つている事を忘れてはならない。「啓蒙思想」もその主知的傾向が極端に流れ、理知の至上權威、所謂知性の優位 Primat des Intellekts が過度におちいり、文藝を教化の手段としてしか認めない極端さにまで進んだ。[註31]藝術天才とはこの目的を明に意識し正確平明なる表現をするものとされるに至つた。この事は「美學」aethetic が「感覺の學」aesthetica であつたことを思えば充分であらう。「疾風怒濤」Sturm und Drang は此への反擊だつたのであり、古典派と浪漫派の共通の地盤だつたのである。ドイツ浪漫派はドイツ古典派の精神を繼續し、發展せしめたとする見方はコルフ H. A. Korff[註32] 始め多くの人々の說く處である。「疾風怒濤」時代に較べれば、ドイツ浪漫派は極めて理知的ですらある。[註33]浪漫的イロニー romantische Ironie や機智論 Witz はその証據でもあらう。又ルソー的原始時代の讃美は「疾風怒濤」時代を通じて「浪漫派」にも續いているが、寧ろ陰に退いて文化教養の尊重が強く表面に出ている事を見逃すべきではない。[註34]「疾風怒濤」「ドイツ古典派」「ドイツ浪漫派」の眞相を充分知り、「疾風怒濤」に著しい性格が無批判に「ドイツ浪漫派」の性格とされたり、むやみに「古典派」と「浪漫派」を對立的にみる事をやめねばならない。かくして我々に與えられている數知れぬ「浪漫的特性」は相當整合される事が出來るのである。それに浪漫主義の源はドイツ神秘思想にもルソーにもヘルデルにもカントにも見出せようが、何よりも直接にゲーテにある事を忘れるべきではない。*Gespräch über die Poesie* はゲーテを文學の指針とする。彼シュレーゲル理論の欠くべからざる素材はゲーテであつた。「浪漫派」のその他の人々からも如何にゲーテが崇拜を受けたかを思い出さねばならない。ベルリンの文壇に未だに殘つていた「啓蒙思想」のゲーテに對する誹難を排したのは彼等であつたのではないか。

勿論「浪漫派」と呼ばれる人々の作品に共通な主調音はあるに相違ない。然し混亂の原因はこの主調音の撰擇のしかたにもある。「浪漫派」の作品よりいろいろな「浪漫派特性」を拾つているうちに、既に不整合であつた「浪漫的」概念は更に不整合な「歴史的」諸概念を注入されてふくれあがつたのである。ハイネにとつて「ドイツ浪漫派」とは「中世文學の再生 die Wiedererweckung に他ならない。」[註35]然しこれも既にグリアスンを手がかりに反駁したように中世文學にはハイネの考えるような素朴な理論はあてはまらないし、ドイツ浪漫派のキリスト教心醉には多分に「啓蒙思想」に對する反動がある事を見逃して

はならない。「浪漫派」の人々が直接主張した「浪漫主義」のさまざまな特徴は此等の人々の作品中から後の批評家が拾いあげる「浪漫的特性」と交りあう。必ずしも「浪漫的性格」にのみ特有とは言えぬものも「浪漫派」の一人のものである事によりその符牒がつけられる事もある。藝術一般に共通なるべき性格も「浪漫派」の一人が主張したものなるが故に浪漫的と呼ばれる事も稀ではない。

所謂「藝術のための藝術」を浪漫主義と結びつける批評家がいる。[註36] 成程「啓蒙思想」は藝術を教化の手段と考えたのに對し「浪漫派」の人々は藝術の獨立的價値を強く主張した事は確である。又有名な「ル・シッド論爭」にみられる藝術の道德的、教訓的、社會的効用を重しとする側の勝利やボワロー Boileau 等と結びつけて對立させ、「古典的と浪漫的」とさせる事も考えられない事ではない。然し何故「藝術の効用」の拒否が「浪漫主義」なのであらうか。この拒否はひとり浪漫主義理論に限るまい。このような廣い意味を「浪漫主義」に與える事は唯混亂の原因となるだけである。藝術の効用といつてもそれに對する「啓蒙思想」の極端な主張の何處か「古典的」なのか。この事に關連して皮肉なのは、「浪漫的精神の源」たるプラトンが藝術の効用を主張し、詩人を理想國家から追放した事である。そしてこの点だけはアリストテレス Aristotle が極めて「浪漫的」である事である。次に「靈感」の問題がある。ヴッケンローデル W. H. Wackenroder やノヴーリス Novalis 等に特に著しい藝術讃美は宗教的にまで到する。藝術への愛は宗教的情熱にまで高められ、藝術家の「靈感」は神來のものとされるに至る。然しその故にこれを直ちに浪漫的特徴とする事は正しいであらうか。「靈感」の傳說は文學と共に古い。ひとり「浪漫派」の獨占物ではない。彼のポープすら筆生 amanuensis を氷りつく夜にも時折呼び起す事もあつたし、ドライデンも *The Rival Ladies* 「献辭」で告白しているではないか。「浪漫派」の人々にこの「靈感」の問題が強く扱われたのは、キリスト教の場合のように「啓蒙思想」に對する反動だと見られる点もあらう。これを本質的特徴に數える事は「浪漫派」の人々を「ニムフに憑かれた人々」nympholepts[註37] に引き下げる以外の何ものでもない。次に「象徴性」の問題がある。「眞に最高のもの無限なるものはついに表現され得ないものであるから、ただ譬喩的にのみ言い現される。あらゆる美は譬喩 Allegorie である。」[註38] とF・シュレーゲルが述べ、或は兄シュレーゲルがこれを受けて「美は無限なるものの象徴的表現である。」[註39] と言つた事などから直に所謂「象徴主義」を「浪漫的內容」としてしまう。成程シュレーゲル的「古代」の基音に對してこのようなものを對立させる事は出來よう。然し既に示唆した如く複雜雜多な「近代」を「古代」に對立せしめ、それを簡單に「浪漫的」と呼ぶ事は批判されねばならない。以上の諸例がその一端を示すと思うが、かくして「浪漫的」概念は益々雜物にふくれあがるのである。

問題は「ドイツ浪漫派」の中にだけあるわけではない。イギリスの Romantic Revival と呼ばれるものは更に問題を複雜にしている。Romantic Revival と言つてもワズワス Wordsworth コウルレッジ

Coleridge バイロン Byron 達が「浪漫主義」の旗幟を高く掲げたり、自らを romantics と呼んでいたわけではない。もともと自國語であつた romantic がドイツに渡つてシュレーゲル的概念を得て再びイギリスに歸つても、その新しい意味はなかなか英語になじまなかつたのである。一八一四年十月 *The Quarterly Review* に W・シュレーゲルの著書の佛譯 *Cours de Littérature dramatique* (London 1814) を論じて文藝理論的意味での「古典的と浪漫的」を紹介している記事がある。そしてその脚註にスタール夫人がイギリスの人々にこの事を知らせてくれたと記している。パリで發禁になつていた *De l'Allemagne* は一八一三年ロンドンで再版されて人氣を呼んだらしく、*The Edinburgh Review* が早速これを紹介しているが肝心の「古典的文學と浪漫的文學」の章には觸れていない。[註40] 一八一六年同誌にハズリット Hazlitt は W・シュレーゲルの英譯を紹介して、「古典的と浪漫的」を彼流にまとめて述べている。[註41] 然しそのハズリットも "The Winter's Tale" でシェクスピアの戯曲を「悲劇的」tragic「喜劇的」comic「浪漫的」romantic と分けて考えた場合の「浪漫的」はシュレーゲル的概念以前の意味を多分に含んでいる。又ドイツ文學の紹介者でもあり、極めて哲學的思索傾向の著しかつたコウルレッジすらも極めて無關心であつた。[註42] カーライル Carlyle も Romanticist 又は Romantic School なる言葉は用いているが、機械的使用であり、寧ろ The New School として「浪漫派」を呼んでいる方が多い。[註43] 彼が Classicism なる言葉をつくり出したと言われているが、これとても Catholicism, Sentimentalism, Cannibalism 等と對置的關係に用いられているに過ぎない。アーノルドにとつて Classicism とは「地方的根性」Provincialism と對立するものなのである。[註44] 結局ペーター[註45]に至るまでは本格的に「古典的と浪漫的」の問題を論じているものはないのである。

勿論 Ossian; *The Seasons; The Complaint, or Night Thoughts on Life, Death and Immortality* 等が十八世紀に既に存在し、大陸の「浪漫派」に非常な影響を與えた事はよく知られている。スコット Scott ワズワス、コウルレッジ、バイロン、シェリィ Shelley キーツ Keats 等の存在はどこの國にも劣らぬ所謂「浪漫主義時代」と言えよう。然しそれはドイツ、フランスに見られるような「浪漫主義」の旗幟の下に於ける運動ではなかつた。彼等の浪漫的性格は「浪漫主義」を一つの全歐州的「思潮」とみて後の人々がつけた符牒なのである。言わば The New School とか The New Poetical School とかと呼ばるべき雜多な性格の人々なのである。それを後から「浪漫的」なる絲で結びつけたのである。既に不整合な「浪漫的」概念は更にこの浪漫的なる符牒をつけられる The New School の逆作用によつて益々不整合さを增したのは當然である。かくしてスコットのすべてが、ワズワスのすべてが「浪漫的」符牒をつけられ、逆にこれこれはスコットの作品の何處にも見られないから「浪漫的」とは言えぬとされるに至る。バイロンのすべてが、シエリイのすべてが「浪漫的」色眼鏡で見られるに至る。ルソーのすべてが「浪漫的」なのであり、「反ルソー的」すべてが「古典的」である素朴な理論と軌を一にするものの如何に多い事

か。

ワズワスの「詩語論」"Poetic Diction"[註46]の何が浪漫的であらうか。彼は修辭的虛飾にみちた「詩語」をしりぞけ、田夫野人の言葉を選べと言う。そこに多少の反動的主張も認められるが、詩材と詩語との相即不離の關係を述べているのであり、散文語と詩語の甚しい分離を誹難したのである。その何處が「浪漫的」であるのか。前の「古典的」と呼ばれる時代の heroic couplets に對する反對の故であるとするのか。然しその詩形を固執する何處が「古典的」なのか。本論の主旨にもそむく誤解の多い言いまわしを使えば、その点「詩語論」はより「古典的」ですらあり得る。傳統破壞の精神は「浪漫主義」のみの特性ではあるまい。傳統や權威に對して屈從的であるのが「古典的」なのか。「總ての足に同じ靴をはかせよう」[註47]とするのが「古典的」なのか。「擬古典主義 Pseudo-classicism」なる言葉こそこれにふさわしいであらう。The Augustan age を無批判に「古典的」としそれに對立するものに「浪漫的」なる名を冠する素朴さを止めねばならない。スコットやバイロンが如何に heroic couplets を好んで用いたかを思い合せてもよい。詩語と散文語の接近を主張した点はむしろ後の「リアリズム」的ではないか。當時としてはあまりに「突飛な實現不可能な」との意味で、シュレーゲル以前の「辭書的意味」(これは後記する)であるのなら論外である。

ワッツ Watts-Dunton は浪漫主義を「驚異の復活」The Renascence of Wonder[註48]だと解釋する。ティーク Tieck が *Der geselle fellte Kater* とその續篇を「浪漫的作品集 *Romantische Dichtungen*」として出版し、その題名について述べて「不思議なもの das Wunderbare」を強調している事にも通ずる。然しハーフォード C. H. Herford は「スコットの世界」を示してくれないとて これを拒否する。[註49] ブリュンチェールの有名な「浪漫主義は何よりもまず個人主義の勝利・自我の全的解放 l'emancipation entière et absolue de moi」も次の如き F・L・ルカス Lucas[註50]により否定される——「しかし浪漫主義の貴重なる例である *The Ancient Mariner* はエゴイスティックであらうか。逆にエゴティズムに反對の說教ではないか。スコットの場合は?キーツは?」[註51]「過剩なるものはすべて詩的である」なる態度を浪漫的とすれば「フェドル Phèdre の情熱は?エディパス Edipus の恐怖は?」と反論を生む。これらが「浪漫主義」をめぐる論爭の泥沼の言わば「どん底」でもある。「浪漫的」符牒にふさわしい如何なる作家も天邊から爪先まで「浪漫的」であらう筈がないではないか。我々には作家或は作品を通して「浪漫的」或は「浪漫主義」なる言葉でなくては表現出來ない文藝理論上のあるものがあるかどうかが問題なのである。「古典的」の場合も全く同樣であらう。

「ドイツの浪漫派」はフランスでこの同名を以て呼ばれているものとは何か全く別のものであつた」[註52]と ハイネはその *Die Romantische Schule* を始めている。所謂 La vie en action「人生を行動に於てみる」氣質のフランス人にはドイツ人の所謂 Gemüt などは理解しにくいものであり、如何なる時代にもルイ十四世紀時代の陰が尾を引いて

いる。ヴォーン C. E. Vaughan は言う――「ラテン諸國はドイツやイギリスより遙に古典的傳統に根深く縛られていたのであり、浪漫主義運動に攫まれるのはずつと後になつてからである。」[註53]しかもこの「浪漫主義運動」le mouvement romantique などと言つても當時の一般の人々には何ら明確なものでなかつた事はデュプュイ Dupuis とコトネ Cotonet の涙ぐましい努力の跡が教えてくれる。浪漫主義酷評の批評家の多いのもこの國である。シャルル・モオラス Charles Maurras にとつて浪漫主義とはフランス文明の古典的傳統を破壞したものであり、外國に發生しフランスに影響を及ぼしたに過ぎない。だからシャトオブリアンの如き「ケルト精神」は似而非フランス精神である。ジョルジュサンド George Sand もスタール夫人もルソーも外國人にすぎないのである。[註54]それ故ルイ・レィノー Louis Reynaud にとつて浪漫主義とは本質的に Anglo-Germanique の現象なのである。[註55]或は又浪漫主義とは「感情的無秩序」desordre sentimental なりと言う批評家もあれば「感情的亂脈 anarchie」とするものもいる。[註56]

「古典的なるものは健全なるもので、浪漫的なるものは病的なものである」[註57]とは有名な言葉である。「浪漫主義」に對する酷評はこの「病的なもの」に對してのみ焦点が向けられる場合が多い。「浪漫的反動は健康である。然し大低の反動のようにやがて突飛なものになり、順次不健康なものなつた」[註58]とルーカスは言う。浪漫主義が反動であるかどうかは問題であるとしても、「突飛になり不健康になつたもの」にのみ目を向けては正しい解釋は生れない。「啓蒙時代」のひからびた理性 Vernunft がどのように「不健康」なものになつたかを思い出すべきである。「規矩」decorum を後生大事と崇め奉り「氣持のよい言いまわし agreeable turn」を競つたイギリスの所謂「擬古典主義時代」の故に「古典的」なるものを誹る愚に似ている。「フランスの浪漫主義は古典主義的專制に對する反抗という以外には多くの理論を持つていないと認められている」[註60]と中島健藏氏は言う。成程ユーゴー Victor Hugo の *Cromwell* 序文はフランス「古典主義」に對する痛烈な反擊に滿ちている。然し「反擊」が浪漫的なのであらうか。我々は既にワズワスの詩論で觸れた如くそれ自体何ら「浪漫的」ではない。「古典主義的專制に對する反抗」と言う場合の「古典主義」とは「啓蒙思想」の臭氣芬々たる「擬古典主義」或はこれに準ずるものでなくてなんであらう。と同時に如何にフランス的特徴を考慮にいれても、これに反抗する「浪漫主義」にのみ浪漫主義を代表させる事は不充分であらう。

サント・ブッブは言う――「シェクスピアは古典作家であらうか。勿論である。彼は今日英國人にとつても世界全体にとつても古典作家である。けれどもボープの時代ではそうでなかつた。その時代及びボープの死の翌日までは、英國の古典作家といえばシェクスピアでなくボープ及びその友人達であつた。然らばボープは英國古典作家ではなからうか。そうではある。けれども第二流の古典である。即ち似而非なる古典作家である。」[註61]この場合「古典的」概念はもはや今までの「古典的と浪漫的」論爭を超越する。そしてこれに對する「浪漫的」

概念はスタンダール Stendhal によつて補われる。即ち「ロマンティスムとは習慣、信仰になんの變化も與えずに出來るだけの樂みを人々に與えることの出來る文學を提供する方法であり、クラスィスィスムとは逆に彼等の曾祖父達に出來るだけの樂みを與えたものを彼等に提供する。」[註62] そして「このようにしてロマンティスムの根本原理に從う人々は次々に『古典的』となり、あらゆる國の人々によつてつくられている共通の連盟 ligue（かくしてこれは絶えず增加していくわけであるが）に加り層一層完成へと近づく。」かくして「古典的と浪漫的」とは全く時代と共に移りいく概念となる。あらゆる立派な藝術はその時代では「浪漫的」なのである。

又一方ジィド André Gide の場合「浪漫的」なるものは克服されねばならないものとして考えられる――「古典的な藝術作品は內部のロマンティスムに對する秩序と節度との勝利を物語るものである。服從せしめられたものが最初に叛逆の度が强ければ强いだけ作品は一段と美しいものになる。」[註63] かくして「古典的」は「擬古典的」から救われるであらう。然しながら同じ事が「浪漫主義」の側からも言える。「常に變化しゆく精神を持つて進み、しかも猶過去の時代に、言わば古典の中に、見事になしとげられたものの雅致をとどめることが眞の浪漫主義の問題である」[註64] とペーターは說く。彼にとつて藝術に於ける浪漫的特性を構成するものは美に奇異 strangeness を加える事であり、美の欲求こそあらゆる藝術的構成中の固定した要素であるから、浪漫的氣質を構成するものはこの美の欲求に「飽くなき追求心 curiosity」を加える事である。「この浪漫的性格を構成するものが均衡をひどく失う時、藝術に於るグロテスクなものを生むが、奇異と美の結合が非常に困難で複雜な條件の下に首尾よく完全である場合、そこから生ずる美はこの上なく魅力あるものである。」かくして浪漫主義も「病的なもの das Kranke」から救われるのである。然し此處で我々はジィドの場合と同樣、もはや「古典的と浪漫的」をめぐる論爭は各自固有の藝術理論を表現するために利用されているに過ぎないのに氣づくのである。かくして又々「古典的と浪漫的」概念は更に多くの雜物にふくれ上るわけである。

文藝理論上の用語の殆どすべてが一方に於て「通俗的意味」を持つている。これが文學史家の惱の重大な一つであることはよく指摘される。「古典的と浪漫的」をめぐる論爭もこの通俗的意味によつて複雜なものにされている。デュブュイとコトネの解釋[註65] は實によくこの混合の惱の見本を示してくれる。これは十九世紀三・四十年代のフランス人の惱なのだが、今の我々と雖も脫け切れない惱である。「三一致の法則」を無視する事が浪漫的なのであり、演劇上の事に限られると思いこんでいたこの二人の田舍紳士は浪漫的詩、古典的詩、浪漫的小說、古典的小說等が存在し、たつた一行でも氣分次第では浪漫的と古典的でもある場合があると知つて驚いてしまう。彼等の涙ぐましい追求は此處から始る。金科玉條たるアリストテレスも此處では役立たない。遊戲と眞劍、美と醜、滑稽と恐怖、言葉を變えれば喜劇と悲劇との提携なのだと思う。だがこの考えも一年とは續かない。當時流行の「イギ

リスかぶれ」の若い一婦人の Voila un site romantique！まあ！ロマンチックな場所！の叫びに二人の困惑は頂点に達する。次に「浪漫主義」とはドイツ、イギリスの演劇の模倣、文學上の一形式 genre historique genre infime そして次には哲學か政治經濟學の体系となり、はては髪を剃らない事、非常に糊のきいた廣い緣取りのついたチョッキを着る事、否嘆く星、號叫する風、飛ぶ鳥、かんばしき花、棕櫚の木の下の泉等々と言うことになる。すると治安判事氏が教えてくれる。――「浪漫主義とはブルボン王家の復興に始る宗教的政治的反動の事である。」そして更に彼氏は言い添えてくれる――「この中世趣味は一八三〇年の革命の後まで續き、鉄道を祝うにロンサールの文体を用いワシントンやラ・ファイアットの頌辭を歌うにダンテを模倣する」と言つた具合にもなる。かくてデュブュイは納得するがコトネは承知できない。四ケ月の蟄居生活の果、彼は發見した！。古典的と浪漫的の違いは後者がふんだんに形容詩を使う事だ。二人の探求を唯一世紀前の田舍紳士として笑えない。その後の批評家にも、一方では文整理論的意味がはつきり通俗的意味から分離しながら他方では通俗的意味が大きく文藝理論的意味に作用しているのを發見する。例えばケーベル博士にとつて「古典的なるもの」とは「典型的なもの das mustergültig」に他ならない。「凡そその類中で完全なる獨特無二の藝術品は皆典型的だと言える。してみれば典型的なる浪漫主義的藝術品が疑もなく存在する以上、浪漫的なるものも又同時に典型的であり得る譯である。」[註66] 此處に我々は古典的な概念がアウルス・ゲリウス Aulus Gellius の classicus scriptor「最上級の作家」にもどつた事を知るのである。サント・ブッブの場合も出發点は此處にある。更に甚だしい例を引用する――「純粹に『古典的』なものはあまりに硬く息苦しく stiff and stifled 純粹に『浪漫的』なものはあまりに醉いしれて氣儘で drunken and wayward『リアリスティック』なものはあまりに單調 drab である。」[註67] これは氣まぐれな言葉ではない。著名なる學者の浪漫主義研究の言はば要約である。このように割切れれば問題は簡單である。

既に冒頭に引用した如くブリュンチェールは浪漫主義の問題を「歴史」の問題であるとし「唯作家と作品とが歴史を通じて、即ち時を通じて與えたいろいろな意味の契機に充ちているにすぎない」とした。ブリュンチェールは浪漫主義時代に歴史を限つたが、アバクラムビはそれ以前にさかのぼる。[註68] 彼にとつて Romantic Movement とは批評をして、眞に「浪漫的」と呼び得る特性を探させ、識別させ始めてくれたものだと言う事に重要性がおかれる。この言葉が文藝理論的意味を持つ言葉となると同時に明かになつた事は、そのずつと以前にもこの意味のものが既に文學に存在していた事である。彼はこのような見方に力点を置く結果、例の論爭の泥沼にはいらず、すつきりした形の浪漫主義理論を展開してくれる。彼の使用する Romanticism はもはや「浪漫主義」とは譯せない。「浪漫的情調」とでも譯すべき意味となる。――ロマンティシズムとは藝術の一要素なのであり、これと對立する要素は「リアリズム」である。人体にはいろいろな体液 humors があり、これが適當な割合にあるとき即ちどの体液も特に著しく多い

などということの無い場合、人は健康である。ロマンティシズムもリアリズムも藝術に於ける体液である。ロマンティシズムとリアリズムの均衡のとれている狀態が「クラスィスィズム」なのである。そして浪漫的要素とは「現實からの逃避」away from actuality なのである。外界 outer world との交りからだんだん去つて層一層自己の中に見出すものにたよろうと努めるか、或は少くともそれを望むのである。かくして順々とアバクラムビは「浪漫的概念」を見事に整合してくれる。然しやはり問題は殘る。「言葉」は單なる符號ではないと言う極めて平凡な事である。「浪漫的」なる言葉はその重い歴史的意味を不可避的に背負つている。すべての人々がこの言葉を少くとも文藝理論的意味にはアバクラムビ的意味にしか使わない事に一致し、これを嚴守する事を誓言しなければこの問題は解決しないのである。

ブリュンチェールの「浪漫主義の定義は語源の問題でも學説の問題でもない。」との言葉も既に引用したが、現代の我々にはやはりどうしても問題に含める必要がある。「學説」ももはや浪漫主義なる言葉に歴史を通じて與えたいろいろな意味の契機の一つとなつているからである。然し飽くまで「學説」としての限界を意識しての上である。何故ならこの學説は既にジィドやペーターで指摘した如く自己の文學理論を主張する媒介としてこの「浪漫主義」「古典主義」を利用している場合が多いからである。*Speculations* 中のヒュウム T. E. Hulme の論文[註69]、クローチェ Croce[註70] の理論を浪漫主義理論に應用したボーウェル A. E. Powell の著書、J・M・マリィ Murry が *God: An Introduction to the Science of Metabiology* の中で説く「浪漫主義」の概念ウィンダム・ルイス Wyndham Lewis アルダス・ハックスリイ Aldous Huxley 等々種々なる學説に溢れている。しかしこの現代の「學説」に就いては別の機會を持たねばならない。問題はあまりに大きいし、「古典的と浪漫的」をめぐる理論よりも「藝術」或は「人生」の本質へと論点が移つている場合が多いからである。

註1 Goethe の「古典的文學と浪漫的文學という概念は今大流行で到るところに論爭や分裂をひき起しているが、それはもともと私とシルレルとにその源を持つている云々。」(Gespräch mit Goethe, 12 Mar. 1830) はそのまゝ受けとれないにしても、Goethe の Schlegel に對する影響の大きいことは言うまでもない。Schiller の Über naive und sentimentalische Dichtung を初め Sehlegel は知らなかつたが、後との論文により Schlegel 理論が修正された事はよく知られている。この二人と Schlegel の關係は興味あり、且重大な問題であるが本論では保留する。

註2 その後彼の理論は大きく展開しやがて複雜難解な浪漫主義の合言葉——Progressive Universalpoesie (進展的宇宙的文學) Athenäum, Fragmente 116. Transzendentalpoesie (先驗的文學)「文學の文學」Fragmente 235 等々——を生み出し、當時の哲學者の影響のもとに思想遍歴をかさねる。然しこのような彼の思想中、後まで生命を持つたものは少へ。

註3 Ferdinand Brunetière: Manuel de l' Histoire de la Littérature française (關根秀雄譯 pp. 213—214)

註4 弟の天才的把握を丹念に整理した著 Vorlesungen über dramatische Kunst und Literature と兄 Schlegel と親交のあつた夫人の著 De l' Allemagne中の一文

註5　F. Schlegel は Gespräch Uber die Poesie の「小說論」中に浪曼的文學は musikalische Poesie であると考えている。Schiller が「詩が造形美術のように一定の對象を模倣するか、或は音樂のように特定の對象をとらずに感情の一定の狀態を喚起するかにしたがつて文學を bildend (plastisch)『造形的(彫刻的)』と呼ばれるか musikalisch『音樂的』と呼ぶことが出來る」(op. cit.) と言つているものと通ずる。又W. Schlegel は「彫刻的」と「繪畫的」としているがこれはいろいろ批判されている處である。

註6　これも又 Schiller が「古代作家は有限の藝術によつて力强く近代作家は無限なるものの藝術によつて力强い。」(op. cit) と言つているのに通ずる。

註8. 9　cf. Some Aspects of the Greek Genius

註10　cf. Romanticism

註11　Qu' est ce qu un classique ? (Causeries du Lundi, 21 oct 1860)

註12　Appreciations の終章參照

註13　Die Geburt der Tragödie

註14　村田數之亮「希臘美の性格」

註15　Curtius: Die Klass. Kunst Griechenlands

註16　W. Schlegel: op. cit:

註17　Die Romantische Schule

註18　Classical and Romantic (The Leslie Stephen Lecture at Cambridge)

註19　Swinbune: Hymn to Proserpine

註20　Nietzche: op. cit.

註21　Deutsche Klassik und Romantik

註22　Untergang des Abendlandes

註23　Der Geist der Gotik

註24　Culture and Anarchy 猶、石田憲次「基督敎的文學觀」參照

註25　e. g. Wilhelm Dilthey, Julius Petersen

註26　竹內敏雄「文學思潮論」(新文學論全集第五卷、河出書房版)

註27. 28　Ludwig Tieck: Die Geschichte des Hernn William Lovell に由來する。

註29　杉捷夫「古典主義」(新文學論全集) 參照

註30　齋藤勇博士は Classicism なる言葉は 1837 年の Carlyle の造語であらうと言う (文學史)。これは N. E. D に Erench Revolution, Ⅱ. Ⅲ. Vi. 286 よりの引用が最初に記されている爲であらうか。

註31　e. g. Gottsched

註32　e. g. Korff: Humanismus und Romantik

註33. 34　小牧健夫「浪曼主義」

註35　Heine: op. cit.

註36　中島健藏「浪漫主義」(新文學論全集)

註37　cf. Irving Babbit: Roussean and Romanticism

註38. 小牧健夫「浪漫主義」(岩波版) p. 30より引用

註40　A Course of Lectures on Dramatic Art and Literature

註41　Characters of Shakespeare's Plays, 1817

註42　1812年の講義で romantic を classical と對立せしめて用いているし、その後もこの言葉を使用しているが、結局 Schlegel からの借物にとどまり、彼自らの思索の對象にはしていない。

註43　既　出

註44　Literary Influence of Academies

註45　The Renaissance; Appreciations

註46　Lyrical Ballads (1800. 1802版) 序文

註47　Victor Hugo: Cromwell 序文參照

註48　Chamber's Cyclopaedia of Eng Lit. Vol. Ⅲ

註49　The Age of Wordsworth

註50　既　出

註51 The Decline and Fall of the Romantic Ideal

註52 尤も Brunetière は皮肉つている——「これより30年ばかりの後 Heine は一書を著して Madame de Staëlの 著を訂正したが、浪曼主義についてはさ程異つた意見をのべていないのである。」(op. it.)

註53 The Romantic Revolt, Chapter Ⅲ

註54 Musset: Lettres de Dupuis et Cotonet

註55 岩崎良三「現代文學とロマン主義」(理性とロマン主義)參照

註56 Louis Reynaud;Le Romantisme franÇais, les Origines Anglo-Germaniques

註57 Pierre Lassere; Le Romantisme franÇais

註58 Gespräch mit Goethe, 2 April 1829

註59 Lucas: op. cit. Chapter Ⅰ

註60 中島健藏(既出)

註61 Saint Beuve; op. cit.

註62 Racine et Shakespere, "Etudes en Romantisme"

註63 ジィド全集(建設社版)第8巻 PP. 79—80より引用

註64 Appreciations の終章

註65 Musset: op. cit.

註66 「ケーベル博士隨筆集」

註67 Lucas: op., cit. Chapter Ⅲ

註68 Abererombie: op. cit.

註69 "Humanism and Religious Attitude" "Romanticism and Classicism"

註70 The Romantic Theory of Poetry